リリカルボール～最強への道

龍の申し子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
リリカルボール～最強への道

【Ｎコード】
Ｎ３８５９ＢＡ

【作者名】
龍の申し子

【あらすじ】
邪悪龍との死闘を終えた孫悟空は仲間達に別れを告げて神龍と共にこの世を去った。だが、突如現れた時空の穴に吸い込まれてしまう。これは孫悟空の新たな物語である。

プロローグ

邪悪龍との死闘を終えた孫悟空は突如現れた神龍の言葉に従い家族や仲間達に別れを告げてこの世を旅立った。
そして、雲を突き抜けた神龍の背中に乗る悟空に7個のドラゴンボールが順番に吸い込まれていく。

「あったけぇなぁ〜〜神龍の背中……」

既に6個のドラゴンボールが悟空に吸収されている。残ったのが祖父の形見である四星球だけとなり、それが今悟空へ吸い込まれる筈だったのだが…。

「———なんだ…!?」

『あれは……』

空間全体が震え出し、それに反応して悟空も目覚める。気が付けば禍々しいオーラを放った漆黒の穴が出現していた。

「あの穴から強えぇ気を感じる…うわああっ!?」

『なっ!?ドラゴンボールが吸い込まれていくだと…』

穴から巻き起こる強風によって吸収した筈のドラゴンボールが悟空の体内から抜け出して次々と穴の中へと吸い込まれていくのだ。だが、四星球だけは離さないようにしっかりと両手で握りしめる。

「くっ、こいつだけはぜってぇ離さねえぇ……うわあああああぁぁぁっ！！？」

『悟空…！　いかん、あのままでは…』

しかし、更に強くなった強風によって悟空はドラゴンボールごと穴の中へと吸い込まれてしまう。それによって次元の穴が膨張し、次元の崩壊の危機を感じた神龍が赤い眼を光らせると吸い込まれる悟空の体が輝き光の線がそれぞれのドラゴンボールへと伸びていく。

『すまない孫悟空…この次元のバランスを保つ為にお前の力と記憶を封印させてもらった。取り戻せるかはお前次第だ』

やがて穴は小さくなり最後には完全に消失していた。だがそこに孫悟空の姿はない。

果たしてこれから先、悟空に何が待ち受けているのだろうか。

プロローグ（後書き）

久しぶりの執筆です。今回は辰年ということもありドラゴンボールとリリカルなのはのクロスに挑戦してみました。他の作者様と比べて描写や文章が下手くそですが雰囲気を壊さないように頑張りますのでよろしくお願いします。後、色々とオリジナル要素が入りますので注意してください

1話　悟空と黒衣の少女

とある廃ビルの屋上に悟空は仰向けに倒れていた。だがボロボロだった青い道着は何故か新品の様に綺麗で背中には赤い棒、腰には何かが入った巾着袋が括り付けられている。背丈は子供の姿で尻尾も健在だ。

“チュンチュン”

「ふあぁ～～……もう朝かぁ～」

小鳥たちに顔をつつかれて悟空は目を覚ます。まだ眠いのか口を大きく開けて欠伸し目を擦ってから身体を起こした。

「あれ？ここどこだ？　オラ山ん中で寝てたはずなんだけどなぁ」

意識が完全に覚醒した時、今いる場所が山でない事に気づく。

「うわあぁぁっ！　どうなってんだ！！亀仙流の道着じゃねぇ！？」

次に自分の服装が別のものに変わっていた事に驚く。悟空の記憶では起きる前は間違いなく亀のマークがついたオレンジ色の亀仙流の道着だったのだ。状況が把握できず慌てた様子で円を描くように周る。

「うわ～どうしようどうしよう……ま、いっかぁ」

さっきまでの行動が嘘のような悟空の軽い発言に小鳥たちが一斉に落下した。

“ぐううぅぎゅるるるる”

「そういや、オラぁハラ減ったなぁ～～」

恐竜の鳴き声のような音が悟空の腹から響く。それに驚いて小鳥たちはその場から飛び立ってしまう。

「よし、食いもんでも探しにいくか！」

腹を満たす為に食料を探しに向かおうとする悟空だったが。

「なんだありゃ？」

筋斗雲を呼ぶ為に空を見上げると、空中から何かが落ちてくる。

「よっ…と！　なーんだ食いもんじゃねぇんか」

軽く跳躍してその何かを手に掴む。そして手を開くと其処には青く輝く宝石、更に０１と数字が刻まれていた。

“カリッ”

「かってぇ〜〜！　やっぱ食えねぇぞぉ〜」

試しに噛んでみたがやはり食べられず、すぐに悟空は宝石から興味を失くす。そして今度こそ筋斗雲を呼ぼうと空に目を向けた瞬間。

「――その石を渡して」

背後から鋭い声が背中に突き刺さる。そして悟空が振り向くと黒いマントに黒の衣装を纏った金色の髪をリボンで左右に括った紅い瞳の少女が立っていた。

「え？　誰だおめぇ」

「……」

金髪の少女に尋ねる悟空だが、少女は答えずに黙って悟空の手に持つ石に視線を向ける。

（間違いない、ジュエルシードだ）

悟空の持つ石がジュエルシードだと確認すると、少女はゆっくりと悟空に近づいていく。
質問に答えない少女に悟空は首を傾げていたが、少女がこちらに近づいてくる事に気づくと。

“パンパン”

「きゃっ！」

「おめぇタマねぇから女だろ」

少女のスカートより下の下腹部に手を当てて叩いた。悟空の予想外な行動に驚いた少女はみるみると頬を紅く染めて悟空に触れられた場所に手を当てる。
普通ならセクハラ行為で訴えられるか殴られるかしてもいいのだが、幸か不幸か現在の悟空は子供の姿。それでも気の強い者ならば手を出しているだろう。
無邪気な笑みを浮かべる悟空に対し黒衣の少女は顔を紅くしたままあぅあぅと唸っていた。

「あぅあぅ〜〜」

「ヘンなヤツだなぁ。ほれ、こいつが欲しかったんだろ？」

「あぅあぅ〜〜……え？」

唸り続けていた少女だが、悟空が差し出した手に視線が入ると目を見開く。少年の掌にある青い石は彼女が探していたジュエルシード。

「…本当にいいの？」

「あぁ。オラには必要ねぇかんな」

しかし少女は一向にジュエルシードに手を伸ばさない。あっさりと差し出す悟空に疑問と警戒心を抱いているのだ。
こんなに簡単に手に入っていいのだろうか？もしかしたら罠かもしれないと感じていたがその考えは思い過ごしだったと知らされる。

「なんだ、いらねぇなら捨てちまうぞ」

「ま、待って！　いるっ！いるから捨てないで…！」

何時まで経っても受け取らない少女に悟空はジュエルシードを投げ捨てる動作を見せる。それを見て慌てた少女は叫んで悟空からジュエルシードを受け取ったのだった。

「じゃあ、私はこれで…」

「へ？　もう行っちまうんか？」

「うん…まだすることがあるから……」

「そっかぁ。また会えるといいな」

立ち去ろうとする少女を明るい笑顔で見送ろうとする悟空。少女も僅かに微笑んで悟空の言葉に頷く。出会ったばかりなのに悟空からは不思議と安らぎを感じていた。

そして少女が飛び立とうとした時。

「いやあああああああああっ！！」

「――――！？」

「なんだなんだ！」

何処からか少女の叫び声が悟空と少女のいる屋上に響き渡る。

「今の声は……」

「こっからだ！」

その声にいち早く反応した悟空は真下に視線を向ける。先程の声は二人のいる真下からのものだと気付いたのだ。
悟空は片腕を振り上げるとコンクリートの地面目掛けて勢いよく拳を叩き付ける。

「でぇりゃあああっ！！」

“バゴッ！”

すると悟空が叩き付けた拳を中心としてあらゆる方角に亀裂が入っていき、コンクリートが砕けて巨大な穴ができたが。

「うわあああっ！！」

「きゃああっ！！」

穴の中心にいた悟空と近くにいた黒衣の少女も巻き込まれて穴の中へと落ちていくのだった。

1話　悟空と黒衣の少女（後書き）

本編でも書きましたが現在の悟空の衣装はＧＴ時の青い道着と黄色いズボンと尻尾に加えて背中に如意棒と腰に布巾着の袋がついています。イメージとしては映画「最強への道」の悟空だと思ってください。後、袋の中身は今はまだ秘密です。勘の言い方にはわかると思いますが。

尚、この小説の更新は不定期になります。それでは！

2話　悟空の実力

悟空と黒衣の少女が屋上で出会った頃、下の階では大勢の黒服の男達が集まっていた。
そして柱の一角には体を縄で縛られて目隠しをされた長い金色の髪を持つ少女の姿が。

「ふぅ～なんとか捕える事ができましたねぇ」

「ガキの癖に手間をかけさせやがって」

「後は身代金を要求すれば俺達は大金持ちっすよね？」

「ああ、なんだってあのバニングス家のご令嬢なんだからなぁ」

「ちょっと！　ここどこなのよっ！！」

少女の付近にいる男達はなにやら不謹慎な会話をしている。状況から察するにこの少女は黒服の男達の手によって誘拐されたのだ。目的は少女と引き換えに得られるであろう大金。
少女が喚いているのも特に気にせず、誘拐に成功した男達は浮かれていたが、只一人の男だけが何かを警戒するように周囲を見渡していた。

「おい、どうしたんだ？　お前も喜べよ」

「あ、いえ…その、また前みたいに“あの男”が助けに来るんじゃないかと…」

「そうだ！あの男がいたんだ！」

「それじゃ、また二年前の時のように……」

それに反応して次々と男達が騒ぎ出す。男達が言うあの男とは不思議な剣術を扱う青年、以前にも彼等の上司となる男達が同じように今いる金髪の少女と紫髪の少女を誘拐したのだが、その青年によって少女達は無事に救出され男達は警察に捕まったのである。

「そうよ！　また恭也さんが助けに来てアンタ達をボッコボコにするんだから！」

男達の会話が少女にも聞こえていたのか、さっきとは違い自信満々に告げる。
だが髭を生やした黒服の男は“くっくっく”と不気味な笑いをすると入り口の扉に視線を向けた。

「バカめ、奴の対策を怠ると思うか？今回のもう一つの目的は奴を血祭りに上げることだ！」

“バゴォーッン！”

突然、入り口の扉が吹き飛ぶ。そして入ってきたのは体長2メートルを超える筋肉質な大柄の男。

「紹介しよう。彼は元ボクシングの世界チャンピオン“ダン・ドーブル”先生だ。先生お願いします」

「はあっ！ふっ、ふっ」

「「「おおおーーっ！！」」」

ダンの見せるシャドーボクシングに男達は歓喜していた。スピード感のある速さで拳を伸ばす。

「どうだ、これで奴が来ても先生のストレートで一発ＫＯ。そうですよねダン先生……？」

髭の男がダンに声を掛けるがダンの意識が向いてるのは柱に縛られている金髪の少女。息を荒くしながら少女に接近していく。

「可愛い…」

「え！？　あ、アンタ誰よっ！アタシに近づかないで！」

少女の前まで近づいたダンは少女の目隠しを解いて笑みを見せる。しかし金髪の少女は視界に入ったダンに背筋を震わせるも強気な態度でダンを拒絶する。
それでもダンは“怒った顔も可愛い”と呟いてますます少女の事を気に入ってしまう始末。その光景に黒服の男達も呆然としていた。
髭の男を除いては…。

「元とはいえ世界チャンピオンだからな。少女を好きにしていいという条件で先生に来てもらった」

「ミスター須藤。この少女の名前はなんだ？」

「名前はアリサ・バニングスです。先生、くれぐれも外傷を与えないようにしてください」

「オーケイ。私は優しいから問題ない」

須藤の返答にダンは頷き己の手を少女の頬に触れ、そのまま割れ物を扱うかのように優しく撫で続ける。

「嫌ぁ…触らないでッ！」

「アリサ、たっぷり可愛がってあげるよ」

「――――いやあああああああああああっ！！！」

嫌がるアリサに不気味な笑みを浮かべるダンが覆いかぶさろうとしたその時。

“ゴゴゴゴゴゴゴ”

「な、なんだ天井が揺れ出したぞ」

「地震か…？」

突如天井が揺れ出す現象が起こる。地震なのかと思い天井を見上げると。

「うわああっ！！」

「きゃああっ！！」

「なぁっ！？」

“ドドォォンッ！”

ちょうどダンのいる真上の天井が崩れてそこから悟空と黒衣の少女が落下してくる。
そして反応が遅れたダンは回避できずそのまま二人の下敷きとなってしまうのだった。

「ふぃ～びっくりしたぁ」

「ここは…？」

ダンが下敷きになったおかげか悟空と黒衣の少女は怪我をせず無事に着地できた。
周囲にいる男達は愚か人質のアリサも何がどうなっているのかまっ

たく理解できない。
全員が呆然としている中、下敷きとなったダンの手がピクピクと震えている。それを見た須藤が慌てて駆け寄る。

「先生ッ！　大丈夫ですか！？」

それに続くように他の黒服達も正常に戻り、黒衣の少女もダンの上に乗っている事に気づいてすぐに離れた。

「てめえら何者だ…ッ！」

「……」

黒服の一人が叫ぶように投げかけた言葉に黒衣の少女は何も答えない。一方、悟空の方は。

“パンパン”

「ひゃあっ！」

「おめぇも女だろ？」

黒衣の少女に行った時と同様、アリサのスカートの上から手を当てて叩いていた。
アリサは悟空の行動に驚いて手を出しそうになるが、未だに縄を縛られて動くことができず。

「あ、あああああんた…い、今アタシになにしたのよ！」

「なにって…パンパンだ」

顔を真っ赤に染めて問いかけるアリサに平然と答える悟空。黒衣の少女も先程の事を思い出したのか頬を染めて俯いていた。

「パ、パン…「パンパンだとぉーーーっ！！」きゃあっ！」

「先生！」

“パンパン”と言う言葉に反応してうつ伏せに倒れていたダンが起き上がる。
そして怒りの形相で悟空の元へと一歩一歩進んで歩み寄り、悟空を見下ろす。

「小僧ぉ、よくも俺のアリサに手を出したなぁ〜〜っ！」

「アンタのものになったつもりはないわよっ！」

アリサが反論するのも無視してダンは悟空に鋭い殺気を送る。
自分より先にアリサに手を出したのが気に食わなかったようだ。

「なぁ、なんであのおっちゃん怒ってんだ？」

「それは多分、君が彼女の……ご、ごめん。私にもわからない…」

悟空はダンが怒り狂う様子に理解できず黒衣の少女に尋ねるが、黒衣の少女は答え始めた所で言葉が止まってしまい顔を紅くして謝った。

「くたばれぇーーーッ！！」

「あぶないっ！」

よそ見をする悟空にアリサが叫ぶが間に合わず、ダンの渾身の力を込めた拳が悟空の顔面に叩き込まれるかと思われたが。

「――消えたっ！」

「バカな！　何処にいったんだ！」

確かにダンの眼前にいた筈の悟空の姿が消えていた。この光景にダンや黒服の男達、アリサや黒衣の少女も驚く。

「こっちこっち～～」

「今、あいつの声が…！」

「あ――――天井にぶら下がってる……」

悟空の声に反応して再び周囲を見渡す中、黒衣の少女の言葉に全員が天井に視線を向ける。
其処には穴の空いた天井に尻尾を巻きつけて逆さまに宙吊りでぶら下がっている悟空の姿。

「ヤッホー！」

「ふざけやがって…サンドバックにしてやる！」

呑気な態度の悟空の姿に更なる怒りを燃やし勢いをつけて連撃を仕

掛けるダンだが。

「いよっと！　そんなんじゃオラには当たんねぇぞぉ」

攻撃が当たる直前で上体を起こして回避し、クルクルと空中で回転しながら地面に着地する。
狙う的を外したダンは勢いをつけてた為に途中で止まる事ができず前方の壁へと激突した。

「ははははは！　なぁにやってんだぁ」

「う…うおおおおっ！！！」

指を差して笑う悟空に遂にダンが理性を失い、ただ猪突猛進に悟空へ突っ込んでいく。

「しつけぇやつだなぁ。オラのジャン拳で終わらせてやる」

そう言うと悟空は静かに構えを取り、真っ直ぐに突撃するダンを見据える。

「ジャーン拳！」

「おおおおっ！！」

「――――グーーーーッ！！」

“ドガアアッ！！”

間合いが急接近した瞬間、握りしめた拳を前に突き出すとダンの腹部に直撃する。攻撃を受けたダンはそのまま勢いよく吹き飛び大の字で壁に激突し、その体制のままゆっくりと倒れて気絶したのだ。

（すごい……）

「な、なんなのよアイツ……」

大柄な体格のダンを拳一つで吹き飛ばして気絶にまで至らせた悟空にこの場にいる全員が驚愕していたのだった。

2話　悟空の実力（後書き）

どうしてこうなった…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3859ba/

リリカルボール～最強への道

2012年1月11日01時02分発行